

オアシス新聞

第2号
集まらぬ虫戸をひらいて

寒い寒いと思っても、3月ともなれば季節は仲春、春も半ばとなってきました。季節を72に区分した七十二候で言うところ「蟄虫啓戸」(すごもりむしとをひらく)と言います。冬眠をしている虫たちが這い出してくる季節となっています。ここで言う虫とは単に昆虫だけでなく、へびやカエル、魚や鳥というように、広く動物全般のことをさしています。

そう、3月5日は二十四節気のひとつ「啓蟄(けいちつ)」です。太陽が地面を暖め、ふきのとうがそと顔を出してくるころ、冬眠していた虫たちも日の光に誘われて、もそもそと動き出します。とは言っても寒の戻りと思いがけない雪が降ったりと、まだまだコートが手放せない日が続きますけどね。私たちよりずっと強い(?)虫たちは、長い冬眠の間にすっかりすききたおなかを満たすべく食べ物を探したり、カエルやチョウたちは卵を産んだり、せっせと活動を始めます。

冬眠と言うとへびやカエルなどが思い浮かびますが、昆虫はどうでしょう。クワガタなどは冬眠して数年かけて生育することによってその大きさを競い合いますが、その他の昆虫はあまり思い浮かばないのではないのでしょうか。というのは成虫で越冬する種はあまり多くなく、そのほとんどは卵や幼虫、サナギの姿で越冬するからです。

では昆虫はどうやって寒い冬を乗り越えているのでしょうか。それは体内に貯蔵しているエネルギーからグリセリンと言う物質を作り出すのですが、このグリセリンは自動車の不凍液にも使われるもので、これによって耐寒性が増し、寒い冬を乗り切ることが出来るのです。また越冬中はわずかに呼吸をする程度で、ほとんど仮死状態の休眠に入っているのです。

冬眠する生物はしないものと比べて長生きと言われています。寒い冬は寝て過ごして、さらに長生きだなんて、なんだかうらやましいですねー

